

復員後は県の職員として、戦災、震災等の復興に尽力され、建設会社を設立されて社長に就任。大野市老人福祉センターの建設等数々の実績を残され、現在も会長として活躍をされています。

社会活動ではボーイスカウトのリーダーとして、またガールスカウトの設立をし、親子三代にわたり青年の育成に尽力され、県知事章を初め数々の顕彰を受けておられ、またライオンズクラブの各役員を務められ、社会活動に活躍され、今はOBとして現社長にバトンタッチをしましたが、毎日元気に会社に出ています。

お忙しいお身体ですが、労苦執筆の件をお願いしましたところ、快く引き受けて下さいました。ご本人の経歴は前ページ記載の通りです。

(福井県 林 俊男)

死に損なった寿命

福井県 上坂 朋男

私はシベリア抑留中、二度死にかけたことがあった。こんなことは、捕虜の間は生殺与奪の権利はロシア兵にあったことだから仕方がなく、誰でも一度や二度はあったと思う。それを思い出して書くこととする。

一回目は昭和二十(一九四五)年十一月ごろ、シベリアに行つてすぐのことだった。「明日は朝からコムソモリスクに作業中の馬を受領に行くので、馬に乗れる者は申し出よ」ということで十人ほど選ばれた。小生も、コムソモリスクというところ一応の都会で、シベリアの密林ばかり見ているのも飽きるので、一度見たいものと思つて申し出た。

翌日朝早くトラックに乗せられてコムソモリスクに連れて行かれた。都会の郊外の牧場まで町を見る機会

は全然なかった。コムソモリスクから私のいた収容所までは六十キロメートルほどと思う。二十頭ほどの馬を十人ほどの日本兵と一人のロシア人で追い回して収容所まで帰って来るわけである。そこらに転がっている縄を馬の背の横に垂らして鎧とし、裸馬に乗るわけである。日本の兵隊で六カ月ほど馬に乗る訓練をしただけで、それも革具で立派に武装した馬には乗ったことはあるが、裸馬は初めてで全然自信がない。しかもこちらは二十歳の繰り上げ入宮で入ったばかりの新兵で、何年も軍隊にいる古年次兵とは違う。とにかく周りに知った者は誰もいないので、ほかの者がする通り馬に乗って皆と一緒に馬を追い回していたが、やはり下手は要領が悪く、途中で疲れて、体が思うように動かず、遂に落馬してしまった。さて馬に乗ろうと思っても、もう馬に乗れないほど疲れていた。そのうち皆は行ってしまうって周りにだれもない。シベリアの密林の真ん中で、しかもシベリアの十一月というと、日が暮れると相当温度も冷えてくる。朝、収容所を出る時、少ない朝食を食ったきり、何も食べてない、力も

出てこない。凍った雪道を馬の行く通り手綱を持ってトボトボと歩いて行く。道は部落を結ぶ一本道でツルツルに凍っている。時々一軒二軒とロシア人の家があり、明かりがついていた。手綱を離すと全く行き先が分からず、離さないように自分の体に縛りつけた。馬は自分の友達の匂いがかかるのであろう、とうとう十時過ぎ、収容所に連れてきてくれた。そして凍死を免れた。しかし、翌日になると、足の親指が凍傷になって腐ってきた。凍傷というのは魚の腐った匂いがして、皮膚も肉も溶けてくる。それから一カ月ほど入院して作業はできなかった。今も親指は変形して少し短くなっている。

二回目は、それから二年ほどたったのことである。伐採に行った時のことで、真夏であった。その日はどうしてか異常にのどが乾き、我慢できず山の中で、この水たまりで、何度もたまり水を手ですくって飲んだ。収容所に帰ると急に凄い下痢になり、しかも高熱を発し、すぐ医務室に入院させられた。夜中に何度も便がしたくなって、高熱だけど、外に建てた便所ま

で、たしか雨嵐の中を何度も走り込んだ。医務室に帰り寝台でウツラウツラ寝ていると看護兵の「ああ、こいつもとうとうあかんなあ」とつぶやくのが、夢うつで聞こえてきた。シベリアでは栄養失調と高熱で、翌朝になると隣の寝台で兵隊が力尽きていることがよくあった。俺もこれでおしまいかと思った。そしてそのまま寝てしまった。シベリアでは生に対する執念がそう湧かない。諦めというか、面倒というか、生きてつらい思いをするよりはと割にあっさり考える。この考えは今でもそのように思えるようになった。今は年をとったからだと思う。さて朝になった。眼が覚めると、つきものが落ちたように爽やかな朝を迎え、スッキリと一遍で完治してしまった。それから以後は、二度も死に損なったから儲けものの命と思うことにしている。

シベリアでは寒くて仕事がつらいし、斧で自分の指を自分で落とし労働忌避で当倉に入れられた等の話を聞いたことがあるし、日本に帰すからと言われて列車に乗って、朝目が覚めると外は一面の雪で、ロシアに

送られていると気がついて貨車の外に飛び出し、逃げられないシベリアの密林を逃げ出して鉄砲でバンバンと撃ち殺されたとか、暗い話を聞いていたが、その点私は最年少でいまだ恋人もなく、次男坊で責任もななく、ただ漠然と捕虜の皆と一緒にだけで、そんなに悲しいとも苦労とも思わず、その点気楽に四年過ごした。

ただ、毎晩の点呼はいやだった。夕方シンシンと冷える外で全員整列し、頭の悪いロシア兵が何度も数え直すが員数が合わなく、情けないやらムカムカするやらで、ストレスが溜まったものである。

それと、いざ日本に送還される時も、またどこかに連れて行かれるかもわからないので安心できなかったこと等、いろいろ皆さん、つらい思いがあったことである。

【執筆者の紹介】

経歴

大正十四年五月六日生まれ。朝鮮にて生まれ、朝鮮に

て育つ。

学歴

昭和十七年三月 朝鮮咸鏡北道会寧公立商業学校五年生を卒業す。

職歴（戦前の）

昭和十七年四月 南満州鉄道株式会社、上三峯駅貨物係勤務。

軍隊歴

昭和十九年十月 朝鮮羅南山砲連隊へ繰上げ入隊。

昭和二十年八月 ソ連と交戦し、終戦後はソ連に抑留され、強制労働に服す。

昭和二十四年八月 復員、舞鶴上陸。

職歴（帰還後）

昭和二十四年八月より昭和三十九年三月まで建設会社、そして食糧卸会社、さらに自動車販売会社等転々と遍歴す。

昭和三十九年四月 丸共特殊織物会社に入社。

昭和四十六年一月 税理士試験に合格し、会計事務所を開業、現在に至る。

上坂氏はいろいろな方面で、特に経理には緻密で経験豊かな方で（丸共特殊織物会社の経営は私の兄）、入社当初より経理課長として勤務していただいた。

氏は余暇を見ては勉強し、遂に大望の税理士試験に合格し、会計事務所を開設された。現在、支店を含めて二十余人の従業員と共に頑張っておられます。

この度、抑留中の労苦、特に記憶に残るものをお願いしましたところ、お忙しい中を快く引き受けて下さいました。

（福井県 佐々木 清左夫）

シベリア抑留物語

福井県 天谷 小之吉

孫が通う小学校の教頭先生（女性）が、私が平成七年に出版した『私のシベリア抑留記』を読まれて、「本当に苦勞されたんですね。うちの学校の生徒にぜひとも講演して下さい、時間を作って（約一時間）